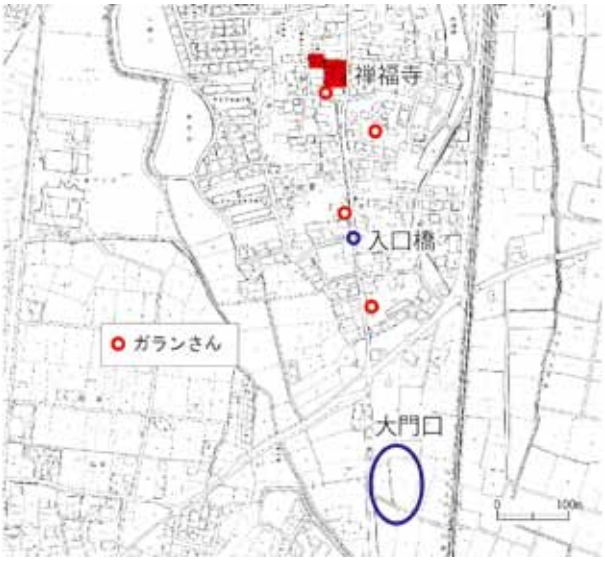
発見！おごおり遺産

No.20 ガランさんと禅福寺

前回までは、テーマに沿ったおごおり遺産を取り上げました。今回からは、一つのモノやコトに焦点を当て、地域のあゆみをより深く掘り下げていきます。

禅福寺南側のガランさん

福童原古戦場のガランさん



ガランさんと禅福寺

小郡市寺福童は、地名から分かるとおり、中世に大型の寺院が存在していたと想定されています。禅福寺境内にある寛政2年（1790）の石塔の銘によると、その寺は「海雲山禅福寺」といい、「蓋千年之寺」（建てられて千年程の寺）で、「中古為兵火失厥」（古い時代の戦いで焼失した）と伝えられます。この「海雲山善福寺」の名前は、隣接する福童神社にある弘治3年（1557）の木板にも登場します。なお、現在の禅福寺は、江戸時代に再興されたものです。このいにしえの寺院禅福寺は、広大な寺領を持っていたと考えられますが、その手掛かりが現地に残されています。

まず地名に、「大門口」があります。これは寺福童の南端に位置し、当時大きな山門が存在していた名残と推定されます。また、地域内の水路にかかる「入口橋」は、地元には「禅福寺の入口だったから」という伝承があります。そして、最も色濃く大寺院の存在を現在に伝えるのが、「ガランさん」と呼ばれる石の存在です。

ガラン（伽藍）とは、サンスクリット語を音写した「僧伽藍摩（そうぎゃらんま）」を省略したものです。元は僧侶が集まって修行する清浄な場所という意味で、後に寺院または寺院の主要建物群を意味するようになりました。

寺福童では、現在4か所の「ガランさん」が確認されます。左上の写真は、禅福寺のやや南にあり、2基の自然石を祀ったものです。左下の写真は、福童原古戦場にあるものです。これは、寛延2年（1749）に書かれた『寛延記』に「がらん神」として登場し、昭和4年（1929）に書かれた『史蹟名勝天然記念物調査報告書第四輯』には、「正面に一円相を描き、下に梵字あれども摩滅して字体明瞭ならず。里人、呼んでガランサンと称す」「歯痛ある時祈願すれば治癒し」とあることから、古くから信仰の対象であったことが分かります。

これらの「ガランさん」の場所には何らかの建物（伽藍）があった可能性も考えられますが、詳細は不明です。現在も続く信仰が、いにしえの寺院の存在を今に伝えています。

問合せ先　文化財課☎75・7555

おごおり遺産とは？》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産＝市民のたからのこと